

お や ば と 歌 壇

長岡 千尋 選

古びたる国語辞典は手になじみ受験の匂い感じて 月 新潟 渡邊 康男
おいわれの時間をつぶすひとつに三十一文字 ころを瘦やす 富山 正源 孝志
国揃れるマスクが分かつ日本よ世界夢見る人々ありて 秋 田 戸沢ケイ子
（選者作品）

山里の近き春待つさくらはなどしは人も呼び交ひ集ふ

千葉 安東 孝

古稀の坂越えたる川はゆつくりと我が人生もゆるる

青森 一戸 幸保

煙の草どこまで延びる根の行方われもどこまで生き延びるやう

岡山 赤堀千恵子

吉野川くるぬくもの影を追へば菜の花岸に遍路ゆきつ

新潟 渡邊 康男

セビア色なりし写真をめぐらみて父母への想ひ昭和懷かし

その利休が死の床に活けたのが天正十九年二月二十九日であつた。その利休が死の床に活けたのが天正十九年二月二十九日であつた。その利休が死の床に活けたのが天正十九年二月二十九日であつた。その利休が死の床に活けたのが天正十九年二月二十九日であつた。その利休が死の床に活けたのが天正十九年二月二十九日であつた。

わびていう革命（大仰な言い方など）に生きた人であつたが、若

その真骨頂といつものがこの「菜の花」だったのかも知れない。若

いときは誰も華やかであるが、老いては冷え枯れた境地をものにして

いたいもの。セビア色の色感がひとつの詩として伝わって来る

る。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう

な詩の形式を生みだしたようである。理由はわからない。たぶん、

神主がよい祝詞も、もう（開じたのである。

日本人は何千年もの定型と行き合ってきたわけだが、ほんらいは

呪詩として用いられたようで、いわばそれは文学として定着した

青春時代、誰もが経験する道である。五句目で「二月」とさらると

收めているが、俳諧では「投げ入れ」というテクニックである。

戸沢ケイ子氏・日本は短歌が好きである。この短歌の形式は、

当然ながら他の国には無い。不思議といはほんとうに不思議だが、

考えてみるとどうも日本語という独自民族のことばが、このよう